

五月の巻

青葉の季節

さすがに花粉に悩まされることもなくなった。連休も何も今はあまり関係ない千歳だが、五月六日の日曜日は、いかにも休日らしい清々しい朝を迎えることができた。午後から雨？と天候は怪しげだが、午前中は持ちそうだ。業平とは直接現地で落ち合うことにしたので、前回同様、川辺に直行する。河原桜はすっかり青々緑々となり、時折強く射す陽光を集めて輝く。微かな風が葉が呼応する様がまた心地よい。新緑をこんな感じて眺めることができるのは、彼の今の心持ち故だろう。お約束の十時まであと五分。少年野球は今回もオフのようだ。今日はバケツ持参の彼は水道で水をまず調達。すると不意に自転車のブレーキ音が。

「毎度っ！」

「これはこれは。また颯爽としたお出ましで」

「ハハハ。ところで隅田さん、ゲスト参加の方は？」

「現地合流にしたので、じき来るでしょう。櫻さんこそ、お連れの方は？」

「遅れて来る、と思います」

お互い、連れを紹介し合う必要性が先送りになり、妙に安堵する。本当は二人だけでもよかった？

覚悟はできていたが、連休最終日のこの日、干潟には再び袋類やらペットボトルやら・・・目に付くゴミは前回ある程度片付けたのに、ひと月でこの有様。「前よりも干いてますね。目立つのはそのせいかも」海同様、川辺でも満ち干きが起きることは前回知ったが、でもそのピークはどうやって調べればいいんだろう。図らずも「干潮」に当たった、ということだろうか。

「今度詳しい人に訊いてみますね」

「環境情報はお手の物ですもんね」

「情報源人物がいるんですよ。ここに来るとああだこうだと言われそうだけど」

足元を確かめながら、歩く干潟を歩く二人。そこへ「あわわわ！」前に聞いたのと同じような声。

「あの方がそうですか？」

「いえ、妹です」

「どつりで第一声が同じ訳だ」

女性っていうから、友人か某かと思ったら、妹さんとは。またしても一本とられてしまっ

だが、ここはつとめて平静を装う。

「櫻姉！ 何ここ？」

「これが荒川の現実よ」

「本当に荒れてんだ・・・ あっ、スミマセン。千住蒼葉って言います。姉がお世話に」

「やだ、お会いするの今日で二回目よ」

「二度目とは思えないんですけどお」

姉妹のやりとりが続く間、千歳は待ちぼうけ。いつもこんな調子なんだろうか。しかし、荒れた川というのは言い得て妙。そのあたりの切り返しは姉並みか。思い出したように櫻姉が取り次ぐ。

「隅田さんです」

「はじめまして。お世話になっております」

蒼葉も再度お辞儀して、したり顔。

「ハハ。ま、いつか。よろしくお願いします」

それにしても青葉の季節に、今度は蒼葉さんとはね。この姉妹は登場の仕方が季節とシンクロし過ぎていると言つか。

櫻姉は、ジーンズにスニーカー、長袖シャツとクリーンアップ向きなのだが、蒼葉嬢は膝丈ほどの白スカートに半袖シャツ、靴は辛うじてウォーキングシューズといった体裁。場所の説明が足りなかったんだらうか。

「一緒に自転車で来てもよかったですけど、午後から展覧会に行くとかいつもんだから・・・」

「バス便を調べて、何とか追いついたんだからいいでしょ」

「でも、すぐわかった？」

「お姉様に似て、地図は強いのよ。そうそう、河川敷を歩いてたらミミズがたくさん這ってたけど、何で？」

自転車で走っているとわからないものである。きっと土が暖まってきたから？と訝りながらも、姉は答える。

「ミミズで驚いた次は、このゴミだもんねえ」

「順番としては、ゴミ ミミズ でしょ」

「しりとりですかあ？ じゃあ」

程なく妹は嬉々として「ズック」すると「ク、黒豆茶！」よく見ると、確かに学校用のズック、そして黒豆茶の飲料缶が転がっている。おそろべし千住姉妹。

あ「ハイ、次は隅田さん」 問答無用である。

ち「や？ 野球ボール」

さ「ル、ル・・・ ルアー」（何でまたルアーが放置されてるんだか）

あ「あ、あー、あれ何？」

青葉の「あ」とかやっても良さそうな場面だったが、そうはならず、あが付く当人によつていったんブレイク。指した先には何かの木片が砂に刺さった状態。軍手を付け、その柄を引っこ抜くと刃の折れた（折り畳み式）ノコギリ！

「これはまたスクープものですね」

「何でもアリね」

「事件性がなければいいけど」

千歳の何気ない一言で、さすがの姉妹も固まってしまった。「いや、その・・・」 蒼葉がフオローする。

「こつちにノコギリで切りかけた合板のかけらがあるよ」

「隅田さん、今日は四月一日じゃなくてよ」

「蒼葉、蒼白しちゃった」

「うまいっ！」

「？」

「蒼白の蒼なんですか？」

「姉にいつも脅かされてるんで、名前の通りになってしまいました」

「蒼葉っ！」

あ「じゃ、隅田さん、今度は『ば』ですって」（まだ続けるつもりか？）

ち「ちよっと待って。ヨシの根元に『バッテリー』発見！」（この干潟はしりとりに事欠かない）

さ「り、リボン・・・ しまった！」

「櫻姉、アウト。干潟一周！」

「エーッ」

姉も姉なら、妹も妹だなあ。「ここですとまず収集前の状況を撮影。千住姉妹も記念に一枚、とってきたかったが、今日は見送り。」頼まれたら撮ることにしよう

十時十五分、ようやくクリーンアップに着手する三人。櫻はお約束の「いいもの」をいつ出すべきか思索するも、もう一人そろってからでいいか、ということにして水際へ進む。枯れたヨシの束が打ち上がって、そこにも細かいゴミが絡み付いてたりするが、そういうのは後回し。まずは大きくて目立つゴミから、だろう。先刻とは打って変わって、黙々とした時

間が流れる。用途は不明だが、プラスチック系の大袋が何枚か横たわっている。櫻がためらう傍らで、千歳がそいつを引き上げると、「わぁ」「えー」と姉妹が声をそろえる。賑やかになるのはその程度。そんな折り、陸の上から呼び声。

「おい、千！」

© nandogger